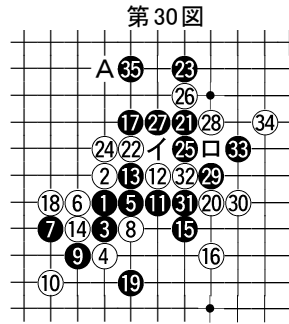


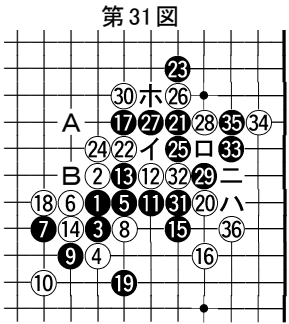
松月定石の一研究 (4)

九段 河村典彦

【第30図】前回、白18と引くのが強防とお伝えしたが、続けて白20



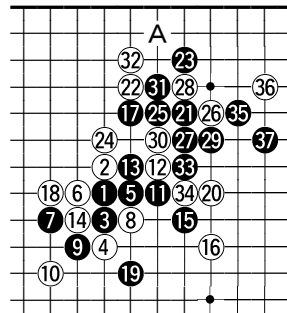
だったが、この図ではまだ余裕がある。具体的には黒23のミセ手が打てるのが大きい。白24の止めに、黒25、27と引けば白は28が絶対となる。後は順に引いていき黒35の両ミセまで。



【第31図】また、白30の反対止めに同じように黒33まで引き、黒35の手筋で解決となる。白36は一応両方を止めた手だが、黒37よりイロハ二ホのノリ切りまで、すっきりと勝てる。

白が変化をすれば22か24

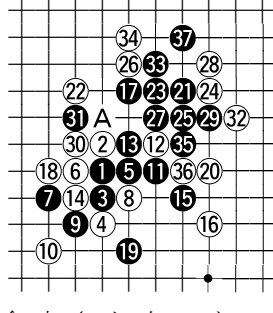
第32図



の所よりないが、24でAやBに止めても理屈は同じである。ホに止める手は黒25からいきなり四追いとなるので確認してほしい。

【第32図】となると、残るは白22の変化である。まず考えられる手は白22と外から剣先を止める防ぎである。これに対しても同様に黒23とミセ手から行くのが良さそう。黒25からもういろいろな勝ちがありそうだが、黒29とミセ手を打つのが確実な方法だろう。黒37まで手数はかかるが白からの反撃を気にしなくてもいい。白32を反対ならAまでである。

第33図

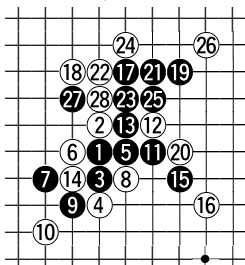


【第33図】続いて白22の浮かし止めを考えると、松月のこの形でこう浮かせる手は強防が多い。この手により縦に剣先ができるからである。

黒23と一旦引き、黒25と見せる。白26の焦点止めに愚直に黒27、29と引いて勝つてそう。白30で腐らされるが、落ち着いて黒33に引けば良い。なお、白24で左止めには37と含んで良い。また、白22でAの防ぎも同様に黒23、25、29と打てばほとんど前図と同じ勝ちになる。とここまで書いて、「そういえば白18で22に浮かして止める手はまだやってなかったなあ」と思って調べてみると、これがまた非常

に難しい。

第34図

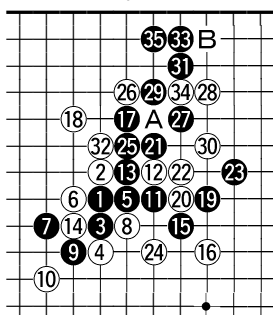


の図である。

【第34図】例えば黒19と同様に開くと、白20が強く、黒21の三に

は白22から止めて白24まで一手四三が残ってしまう。黒25から防ぎに行くようではあつたという間に混戦となってしまう。最初は確認のつもりで調べていたが、なかなか勝ちが見つからない。浮かし止めはやつぱり強い。2晩(実際には1週間以上かけて考えたが)以上かけてようやくひねり出した手が次の

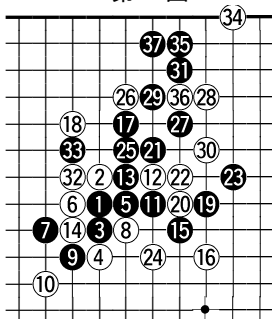
第35図



【第35図】いきなり黒19、21と引き出すのが盲点であつた。どのみち白20に止める手が強いので黒19を打つのも変わらないという発想である。(21のミセ手から行くとかえつて変化が多くなる)黒23と引けば白は当然24とノリ手で止めてくるが、黒25で一且止めた後、黒27から29と打つのがまたしても盲点の三引きとなる。この手の意味は、黒31に引こうとい

うことである。この方向に三を引けば、ノリ切りとなるので四ノビをしようがしまいが結局白は引いた方と逆に止めなければならぬ。この手を打てれば以下容易で、後は黒35までの両勝ちとなる。この順を発見した時には胸のつかえが取れ、スッキリした気分になつた。

第36図

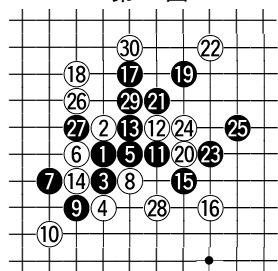


なつた。詰連珠が解けた時も同様の気分になるのだろう。これだから連珠はやめられない。

【第36図】しかもスッキリした順であるために、変化もほとんどない。あえて言うならば白32の所で四ノビを利かして白34まで防ぐというトリッキーな防ぎもないことはないが、同じように打てば終わっている。

【第37図】ここでそれまで検討した図もご覧いただこう。最初は形良く黒19と打つ手から始まつた。

第37図



先にも述べた通り白20が強防。横に引く手がうまく行かないとなると、黒21、23と打つ手が最後に残つた攻めとなる。前図とは黒19に四ノビがあるかないかだけの違いなのだが、その四ノビ一本で勝てなくなる。黒25と引いた瞬間に白に26と四を打つ手がある。この四により、白30までの局面となつた時、肝心の地点が三々で打てなくなつて出る。黒19の四ノビを保留していればこの防ぎはない。詰連珠として出していたら、おそらく大量の落選者を出していたらう。

結果的には四ノビ一本の差ではあるが、打ち出しの発想がまるで違ふ。実戦で黒19から追い勝ちができる人は皆無である。並べてみて、この手順を味わってもらえれば幸いである。